本　　編

序

「北東北ならでは」の風景・景観資源の有効活用に関する調査について

１．趣 旨

・　「北東北ならでは」の風景・景観資源の有効活用に関する調査（以下「風景・景観調査」という。）は、北東北三県で実施する国土施策創発調査「北東北のグランドデザイン」に関する地域の自立・経済の活性化方策検討調査（以下「創発調査」という。）の一環として、青森県が実施するものである。

・　創発調査は、人口減少・高齢化や国境を越えた地域間競争等の新たな国土政策上の課題に対応するためには､都府県を越える規模の自立した地域ブロックからなる国土の形成が必要であるという認識を踏まえ、先進的に広域連携の取組みを進めている北東北三県(青森、岩手、秋田)において、「地域資源」の県を越えた相互利用、広域的な観点からの社会資本等の有効活用等について、地域住民のニーズを踏まえて総合的かつ具体的に検討し、地域主体の広域ブロック計画や他地域の広域連携事業のモデルとするとともに、国際競争力の向上等による自立・安定した地域社会の形成を目指すものである。

・　風景・景観調査は、北東北ならではの風景・景観を分類整理し、北東北共有のアイデンティティとして確立することにより、風景・景観を地域活性化の資源として活用することを目的として実施するものである。

・　また、市町村合併が地域の個性消失につながるのではないかという懸念がニーズ調査の結果から明らかになった。このことからも北東北の風景・景観を守り、育てることは重大な意義を持つものである。さらに、北東北について親しみは感じるが、経済的な一体感まではないことも明らかになった。文化的な距離感を強固なものとし、経済的な距離感にまで高めるためにも、既存の風景・景観資源を把握することが重要である。

２．風景・景観資源の範囲

・　風景、景観とは、一般的には「自然の景色やながめ」を意味するが、風景・景観調査では、自然の景色だけではなく、縄文文化等の歴史資源、伝統芸能等の文化資源、人々が活き活きと働き、日々の暮らしを楽しむ姿がつくりだす農山漁村やまちのたたずまい等も風景景観資源として捉えることとする。

・　景観法の基本理念として「良好な景観は、地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和により形成されるものである（同法 2 条 2 項)」と掲げられていることからすれば、風景・景観資源を幅広く捉えることが、今後の風景・景観について検討する場合には適当と考えられるからである。

３．調査体制

・風景・景観調査は、下記のように、岩手県を幹事県として三県により設置した『「北東北のグランドデザイン」に関する地域の自立・経済の活性化方策検討調査』検討委員会のもとに

『「北東北ならでは」の風景・景観資源の有効活用に関する調査部会』を設置して検討を行った。

・　調査業務は、企画提案競技により、財団法人 国土計画協会を選定して業務委託を行った。

「北東北のグランドデザイン」に関する地域の自立・経済の活性化方策検討調査』検討委員会

区　分	氏　名	所　属	備　考
委　員　長	清水　浩志郎	秋田大学工学部資源学部教授	社会資本調査部会長
委員長代理	山田　晴義	宮城大学事業構想学部教授	地域資源調査部会長
委　　員	北原　啓司	弘前大学教育学部教授	風景･景観調査部会長
〃	大滝　精一	東北大学大学院経済学研究科教授	
〃	賢木　新悦	北東北広域連携推進協議会会長	
〃	高嶋　裕一	岩手県立大学総合政策学部助教授	

「北東北ならでは」の風景・景観資源の有効活用に関する調査部会

区　分	氏　名	所　属
部　会　長	北原　啓司	弘前大学教育学部教授
委　　員	田村　美幸	公共の色彩を考える会会長
〃	森田　玲子	十和田国立公園観光協会婦人部副会長
〃	吉村　レイ	NPO 関善賑わい屋敷副理事長

４．調査の概要

・　「北東北ならではの風景・景観を分類整理し、北東北共有のアイデンティティとして確立することにより、風景・景観を地域活性化の資源として活用することを目的とする」本調査の実施に当たり、まず始めに北東北の自然・人口等に関する各種資料（データ）の分析、地域内関係者へのアンケート調査、地域内外の有識者へのヒアリングによって、北東北における風景・景観の特性（「北東北ならでは」）を抽出整理した。（第Ⅰ章）

・　次に、第Ⅰ章で整理した特性と北東北の課題を踏まえ、新たな視点（新たな北東北像）により風景・景観資源の集積及び分布の状況を把握することによって、北東北における風景・景観の多様性、独自性、活用可能性を明らかにすることを試みた。併せて、この整理の枠組みに基づき、今後の地域内外の取組みのきっかけづくり、取組みの基礎資料とするためデータベース及びマップを作成した。（第Ⅱ章）

・　さらに、第Ⅱ章で提示した資源の集積･分布状況と北東北の抱える社会的課題（人口減少、高齢化等）を踏まえ、風景・景観資源の活用によってできること（活用方針）の提示と、具体的な活用モデルの提示を試みた。（第Ⅲ章）

・　最後に、北東北ならではの風景・景観資源の有効活用に向けた取組みの具体化に向けた方策として、仕組みづくりと施策展開のあり方、並びに体制づくりと役割分担のあり方の考察を行った。（Ⅳ章）

調査の流れ

北東北の風景・景観特性の把握

●自然に見られる特性

●歴史・文化に見られる特性

●生活・経済活動に見られる特性

●北東北各県における風景景観計画と取組みにおける特性の認識

●アンケート調査及びヒアリングによる北東北の風景・景観特性の把握

●北東北ならではの風景・景観特性の抽出

↓

北東北の新たな地域像と風景・景観資源の集積及び分布の状況

●資源の集積及び分布状況の把握の視点

●新たなテーマに基づく北東北像のイメージ

↓

新たなテーマに基づく風景・景観資源の集積及び分布の状況

風景・景観資源の集積状況 ＜風景・景観資源データベース＞	風景・景観資源の分布状況 ＜風景・景観資源マップ＞

↓

北東北ならではの風景・景観資源の活用と守り、育てる方針

地域社会の現状と資源の活用と守り、育てるための課題
＜持続可能な社会づくりの基本理念＞

↓

風景・景観資源の活用と守り、育てる基本方針

風景・景観資源の活用の基本方針　　風景・景観資源を守り、育てる基本方針

↓

想定する活動創出分野

↓

活用モデルの例示

↓

有効活用のための仕組みと体制づくりのあり方

●風景・景観資源の活用によって得るべき効果

●仕組みづくり取り組みの展開のあり方

●体制づくりと役割分担のあり方

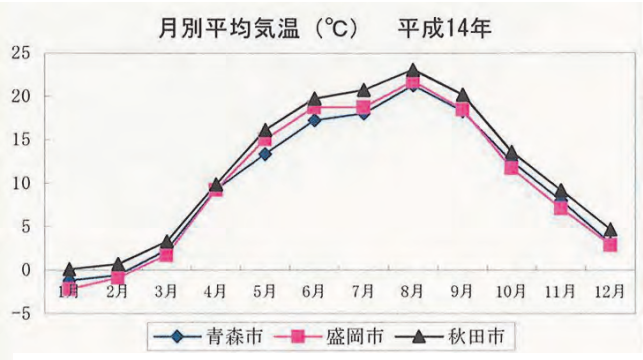
●施策としての具体化に向けて

第Ⅰ章　北東北の風景・景観特性の把握

１．自然に見られる特性

１）変化に富む四季

北東北においては、月別平均気温が、最高の８月で21～23℃前後、最低の１月で０℃前後であり、気温の年較差の大きさが日本列島の中でも四季の移り変わりの明瞭を際立たせている。



出典；北東北グランドデザイン（中間報告）（2004．9）

２）地形及び植生

北東北三県は、ともに奥羽山脈をいただき、自然公園や世界自然遺産白神山地をはじめとするわが国有数の自然が残されている。

それら北東北の自然植生には、人の手が関与し、集落周辺では里山と呼ばれる二次林が広範に展開しているという特徴がある。

世界遺産に指定された白神山地及びその周辺も、古くに人の手が関与し、現代では自然林に近い植生に移行した樹林地である。

また、それら植生は、北東北全体にわたって緩やかな山容の地形であることを背景に、広大に展開しているという特徴がある。

北東北の植生と分布の状況
資料出典；第４回自然環境保全基礎調査
（平成元～４年・環境省）

３）豊富な温泉

北東北各県は、温泉数に恵まれ、また、自然の中にたたずみ、野趣あふれることを特徴とするものが多い。

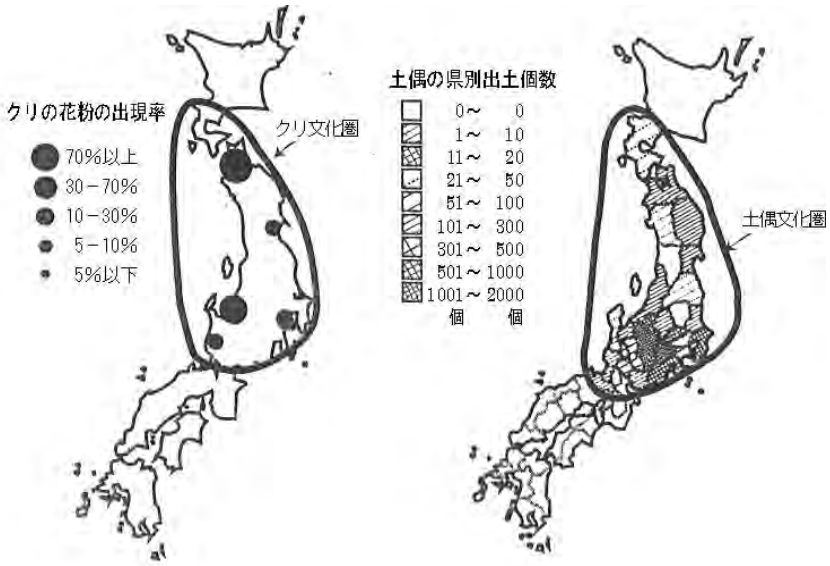
■北東北各県の温泉のランキング（資料；平成 14 年環境省「温泉利用状況報告」

	温泉地数		源泉数		温泉を利用した公衆浴場	
	箇所数	順位	箇所数	順位	箇所数	順位
青森県	154	3	1007	7	248	5
岩手県	89	9	372	20	67	22
秋田県	127	6	562	11	151	11
全　国	3023	—	26796	—	5080	—

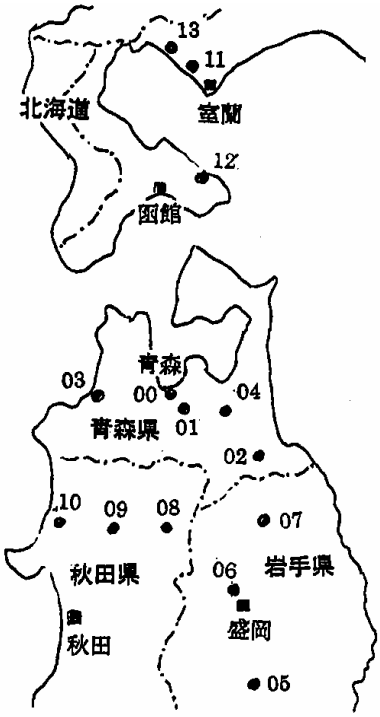
２．歴史・文化に見られる特性

北東北には、三内丸山遺跡（青森市）、御所野遺跡（一戸町）、大湯環状列石（鹿角市）をはじめとする縄文遺跡が数多く存在する。

また、北東北の縄文文化は、「円筒土器文化圏」と呼ばれる、独自の文化圏を形成していたことが明らかになってきた。



縄文時代中期のクリ文化圏（左）と土偶文化圏（右）の一致（安田，1995）



円筒土器文化圏の主な縄文遺跡

青森県	岩手県	秋田県	北海道
00 三内丸山遺跡	05 樺山遺跡	08 大湯環状列石	11 北小金貝塚
01 小牧野遺跡	06 湯舟沢Ⅱ遺跡	09 伊勢堂岱遺跡	12 大船 C 遺跡
02 是川遺跡	07 御所野遺跡	10 杉沢台遺跡	13 入江貝塚
03 亀ヶ岡遺跡			
04 二ツ森遺跡			

出典；縄文遺跡の連携による地域活性化手法に関する調査（平成 14 年国土交通省国土計画局）

３．生活・経済活動に見られる特性

１）広域分散居住

北東北には、広大な自然と居住が密接に関わっており、北上川水系に沿って市街地が連たんしている状況が見られるが、それ以外の地域においては、居住人口の分布に、奥羽山脈と北上高地の山並みによる盆地と平野だけでなく、中山間地域にまで、広域的に分散居住しているという特徴が見られる（次ページ図参照）。

また、居住地の人口密度も、疎・密のばらつきは全国他地域に比較すると少なく、広大な地域的広がりを有することとあわせて、“広域分散居住”が展開していることが大きな特徴であると見ることができる。

都市人口についても、全国的に都市への人口集中が続き、特に県庁所在都市への人口集中が顕著に進んでいる状況に対して、北東北三県においては、県庁所在都市への集中率は若干高まっているが、全国他地域に比較すると相対的に低く、10 数万人未満の中小規模の都市が多いという特徴がある。

このような特徴を反映して、北東北の風景・景観には、大自然の中に集落が点在するという独特の景色を形づくっているという特性が見られる。また、人口の分布に縄文遺跡の分布を重ねてみると、市街地の位置と縄文遺跡の位置が概ね符合することが明らかとなる。

表　北東北各県における県庁所在都市への人口集中の状況（資料；国勢調査）

	平成７年			平成 12 年		
	県人口（千人）	県庁市人口（千人）	集中率（%）	県人口（千人）	県庁市人口（千人）	集中率（%）
青森県	１,５０８	２８７	１９．７	１,４７６	２９８	２０．２
岩手県	１,４３０	２８２	１９．７	１,４１６	２８９	２０．４
秋田県	１,２１９	３０９	２５．４	１,１８９	３１８	２６．７
全国平均	１２５,２５７	３６,３１２	２９．２	１２６,９２６	３８,４７４	３０．３

２）産業

北東北の産業構造には、全国他地域に比較して農林水産業のウエイトが高いという特徴があり、三県の産出額はいずれの分野でも全国で３位以内に位置する。食料自給率（カロリーベース）も、三県とも 100%を超え、全国的にも高位に位置する。

このような産業に関連して、北東北には、農業に関連する風景・景観が豊かに展開する。

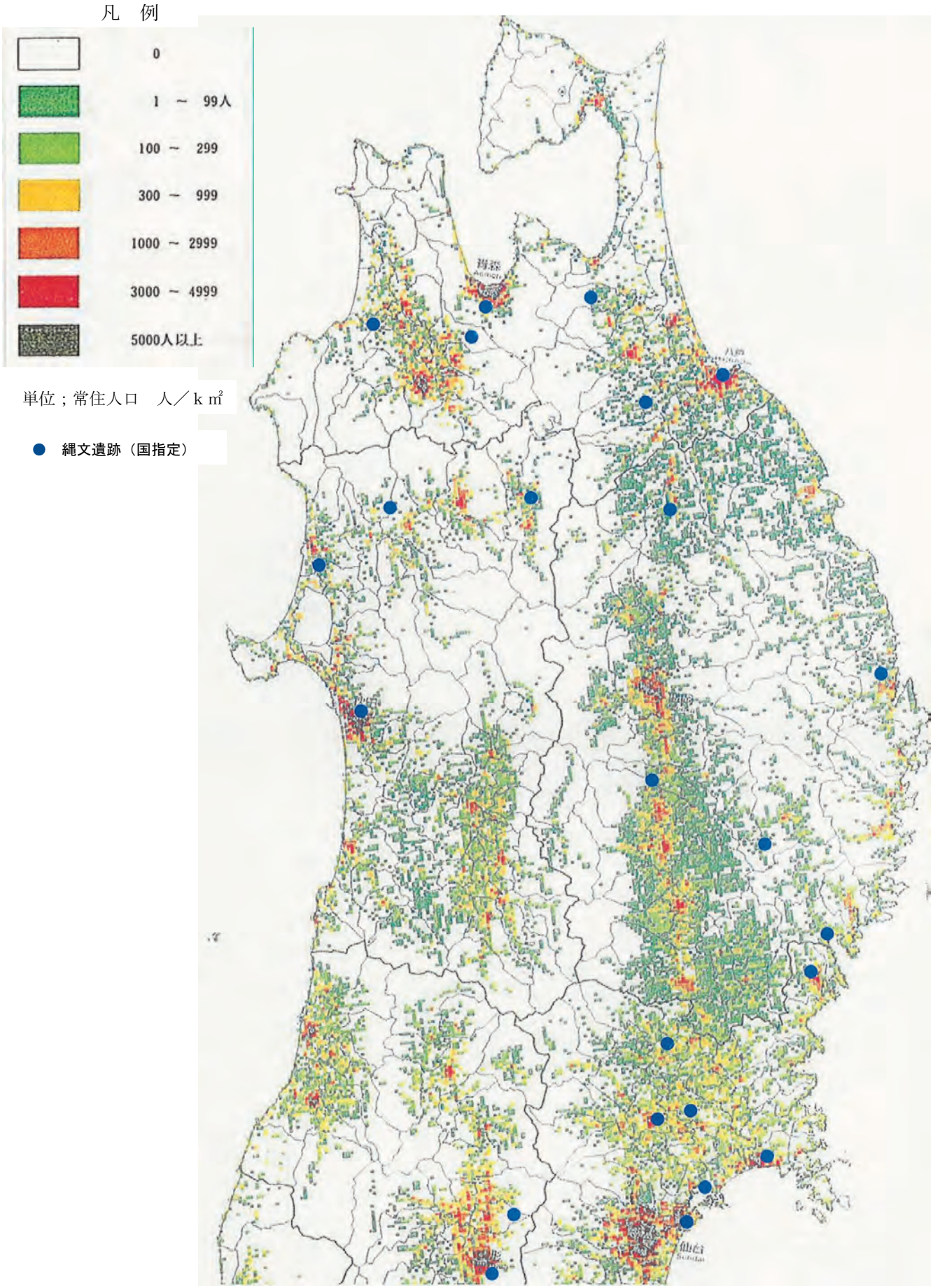
農林水産業産出額に見る全国順位

項　目	青森県	岩手県	秋田県	三県
農業産出額	13	10	20	2
米	12	10	2	1
果実	2	20	29	1
畜産	11	4	31	2
漁業生産額	7	11	38	3
林業産出額	15	5	13	3

食料自給率（カロリーベース）

	自給率（%）	順位
全国	40	—
青森県	115	4
岩手県	102	5
秋田県	158	2

（資料）H14農林水産省「生産農業所得統計表」ほか



北東北の人口分布と縄文遺跡（資料出典；平成７年国勢調査）

４．北東北各県における風景景観計画と取組みにおける特性の認識

北東北各県においては、各々独自に風景・景観特性の保存と活用の取組みが行われており、各県の風景景観形成の基本計画に該当する計画書により、理念として、次の共通性を見出すことができる。

①豊かで美しい自然景観を守り育てる
②農山漁村の風景景観を大切にする
③歴史的文化的資産や街並みを大切にする

	青森県	岩手県	秋田県
取組みの基本理念	**あおもり　景観創造プラン** ●目標・基本方針（３つの柱） ◎なりわい（時空をこえた生活文化を活かす） ◎にぎわいを演出する（地域の活力を創出する） ◎もてなしの心を表す（歓迎の心や温かい気配を表現する） ●景観の保全・創出に向けた視点（５つの視点） ◎「さと」；田園・里山・集落・農家のたたずまい ◎「まち」；あおもりらしさ、角・筋・間、 緑あふれるまちなみを創る、みんなでまちなみを創る ◎「みち」；心地よい沿道、生活者の視点、花の回廊や並木道 ◎「かわ」；川と人の関わり、まちづくり・さとづくり ◎「うみ」；港湾、漁村、海岸線	**心に響く景観づくり** **―岩手の景観の保全と創造に関する条例―** ●基本的方向 ◎自然環境との調和、歴史的文化遺産・民話の伝承、伝統技法などの風土を生かす ◎地域地域の個性を生かし、快適な生活環境の形成と新しい岩手の文化を創造する ●重視する景観 ◎山岳、高原、河川、海岸等の優れた自然風景 ◎神社、寺院、遺跡等歴史的文化遺産の景観 ◎良好な市街地景観 ◎田園、港等で優れた景観	**この秋田に住んでよかった** **―私たち秋田のより良い景観に向けて―** ●基本理念 県民歌に歌われる「世界に名を得し、誇りの湖水、山水皆これ詩の国秋田」にあらわされる地域生態系、「歴史はかぐわし誉れの秋田」にあらわされる地域文化、「正義と自治のさとしを体し」にあらわされる地域社会の健全性を表す ●守るべき景観 ◎自然景観（山岳景観、湖沼景観、海岸景観） ◎歴史的文化的景観（角館武家屋敷など） ◎農村・山村・漁村景観
支援施策	●景観アドバイザー制度 ●景観賞（２市町村）；八戸市、青森市	●まちづくりアドバイザー制度の創設 ●景観形成住民協定の認定	●秋田県景観専門委員によるアドバイザー派遣
主要な取組み	●ふるさと眺望点の指定 ●市町村による基本計画策定（19 市町村）； 尾上町、六戸町、深浦町、名川町、五戸町、小泊村、東通村、鰺ヶ沢町、蟹田町、鶴田町、十和田湖町、柏村、下田町、市浦村、西目屋村、蓬田村、倉石村、中里町、横浜町、八戸市	●景観形成重点地域の指定 ◎岩手山麓・八幡平周辺 ◎平泉周辺	●景観対策関連事業の実施（20 市町村） ＊男鹿市、湯沢市、小坂町、鴻巣町、二ツ井町、藤里町、峰浜村、天王町、大潟村、河辺町、象潟町、仁賀保町、中仙町、協和町、太田町、千畑町、六郷町、雄物川町、大雄村、皆瀬村

注；市町村名は、各計画策定当時のもの

５．アンケート調査及びヒアリングによる北東北の風景・景観特性の把握

（1） アンケート調査による北東北の風景・景観特性に対する認識の把握

先に北東北の風景・景観の自然や歴史資源に見られる特性を概観した。しかしながら、人々の風景・景観についての関心は、国土の将来像に関する世論調査（平成 13 年 6 月内閣府調査）による、今後の国土づくりについて力を入れるべき点として、「美しいまちなみや景観の形成」を挙げた人は７％、「歴史や伝統を生かした地域づくり」を挙げた人は 5.4%にとどまっていることに見られるように、必ずしも高くないと考えられる。また、それらの特性が地域の人々に十分認識されず、結果として、その資源の特性を生かした活動に結びつかないことが考えられる。風景・景観資源の特性についての認識と評価は、人それぞれの価値観によって大きく異なることも考えられる。

このため、本調査においては、北東北居住者の、北東北の風景・景観資源の特性についての認識等を明らかにすることにより、風景・景観資源の活用方策等の検討資料とすることを目的としてアンケート調査を実施した。

アンケート調査の対象者は、風景・景観に関する関心が比較的高いと思われる北東北三県の景観審議会委員等としたが、青森県のホームページへの掲載によって風景・景観に関心がある方からも回答を得られるようにした。

ⅰ．アンケート対象

１）郵送によるアンケート

・青森県；青森県景観審議会委員１１名、景観人６１名

・岩手県；岩手県景観審議会委員１６名

・秋田県；秋田県景観審議会委員等２０名

２）青森県ホームページによる掲載

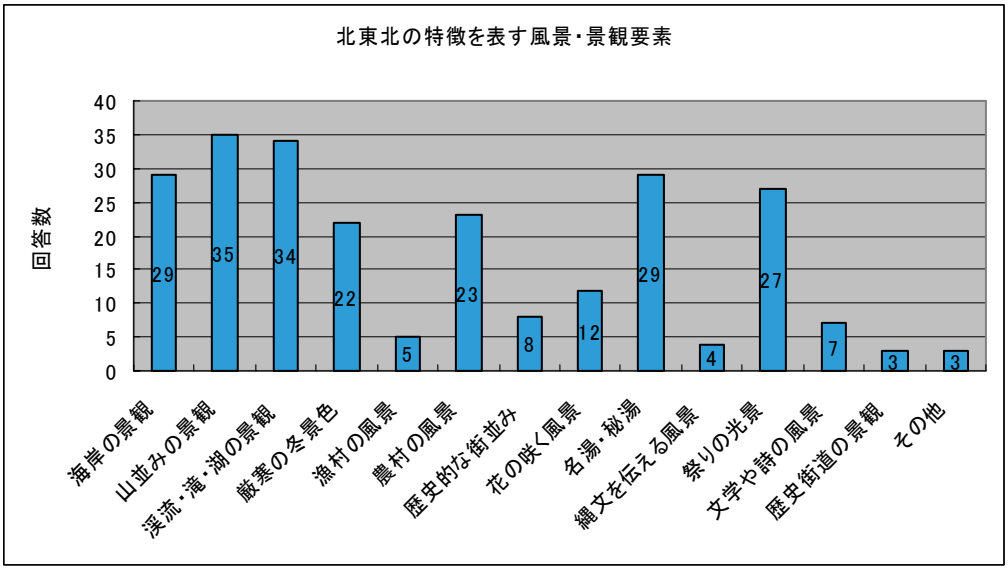
ⅱ．アンケート回答者の属性

	性別	３０代まで	４０代	５０代	６０以上	計
青森県在住者	男	6	5	１０	6	２７
	女	3	1	5	3	１２
	計	9	6	１５	9	３９
岩手県在住者	男	1	—	1	3	5
	女	—	—	2	2	4
	計	1	—	3	5	9
秋田県在住者	男	1	—	1	2	4
	女	1	—	—	2	3
	計	2	—	1	4	7
その他	男	1	1	—	—	2
	女	—	—	—	—	—
	計	1	1	—	—	2
合計	男	9	6	１２	１１	３８
	女	4	1	7	7	１９
	計	１３	7	１９	１８	５７

iii．アンケート結果の概要

１）北東北の風景・景観の特徴についての認識

自然の風景・景観の割合が最も多く、次いで温泉、農村、祭りの光景といった生活に関連する要素があげられた。一方で、歴史・文化資源を上げた回答数は少ない。しかしながら、平成 13 年の内閣府による国土の将来像に関する世論調査によれば、移り住むとしたら、現在住んでいるところより自然環境に恵まれたところとの回答が最も多い（43.7%）ことに見られるように、環境に関する認識は今後高まる方向に推移していくと考えられる。



２）北東北で「特に良い」「大切にしたい」と感じる風景・景観

特に良い、大切にしたい風景・景観についても１）と同様の傾向にあるが、１）に対して祭りの光景や温泉を挙げた回答数が少ないことは、人々の、風景・景観という概念に、生活文化や歴史を含む認識がまだ十分に定着していないためではないかと考えられる。

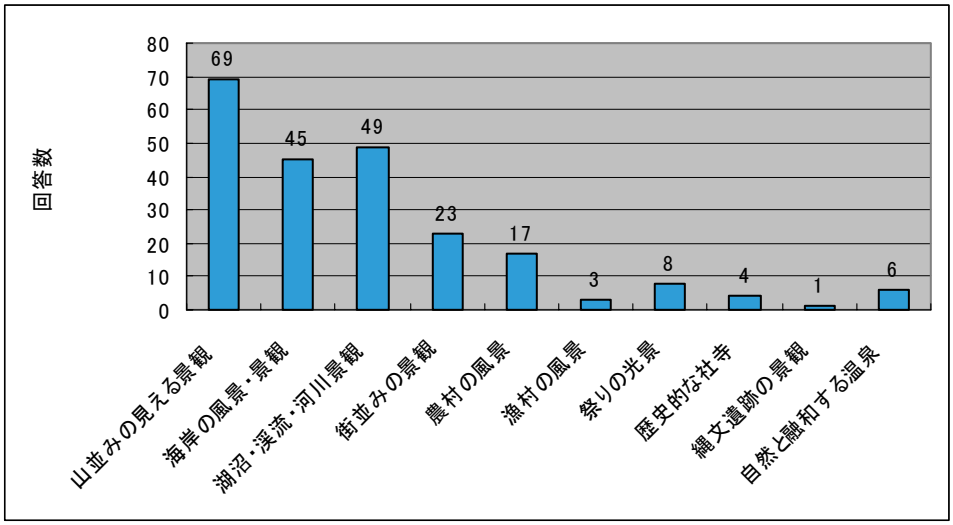


表　　「特に良い」・「大切にしたい」としてあげられた風景・景観

分　　類	あげられた風景・景観
自然に関連するもの 山並みの見える風景･景観	岩木山（16)、岩手山（10)、八甲田山（12)、白神山地（８)、八幡平（３)、鳥海山（３)、恐山（２)、名久井岳（２)、田代高原（２)、大黒山、森吉山、蔦原高原、城ヶ倉、鞍掛山、安比高原、八森岳、和賀山塊
海岸の風景・景観	三陸海岸（11)、種差海岸（９)、男鹿（４)、仏が浦（２)、深浦（２)、五能線（２)、竜飛崎（２)、西海岸（２)、碁石海岸（２)、海岸林（２)、大須賀海岸、白浜海岸、陸奥湾、津軽半島、北山崎、入道崎、海に沈む夕日
湖沼・渓流・河川の風景・景観	十和田湖（17)、奥入瀬（17)、田沢湖（３)、十三湖（２)、田代湿原、森吉山小又峡、蔦五湖、十二湖、松川渓流、青葉湖、象潟、阿修羅の流水、雄物川
街並みの風景・景観	弘前城と周辺（９)、角館武家屋敷（７)、黒石市こみせ通（２)、平泉（２)、寺山修司記念館へのアプローチ、岩手銀行中ノ橋店、達窟の岩屋
農村や農業の風景・景観	小岩井牧場（２)、林檎畑（２)、岩木山麓の田園（２)、津軽平野（２)、寒立馬（２)、南郷村、五城目町馬場目北の又集落、宮沢賢治の岩手の農村、散居、田植えの風景、遠野
漁村や漁港の風景・景観	津軽の漁村、蟹田港、八戸港、青森港
祭りの光景	ねぶた祭り（３)、ねぷた祭り（２)、竿灯（２)、横手のかまくら
歴史的な社寺	中尊寺（４）
縄文遺跡の風景・景観	三内丸山遺跡
自然と融合する温泉	鶴の湯温泉（３)、下沢温泉、夏油温泉、乳頭温泉

●北東北の風景・景観の特性・よさについて自由意見

・緑に囲まれた当たり前の景観が都市部の住民にとって新鮮に映ると思う。シンボルとなっている山、変化に富んだ海岸線など「あるがままの自然」（１４件）
・三県にまたがる雄大な山並みと東西で植生などが異なる変化
・同じ場所でも四季で変化する点（２件）
・素晴らしい風景・景観の中に温泉がある点
・北国の春に歌われるように、街並みより自然。雪解けを待つカラマツなど、冬に春を思い、夏に秋を思う心象風景
・祭りと農山漁村
・農業の風景（３件）
・都会的なデザインに侵されていない風景。視界をさえぎる建築物がない風景（２件）
・多くの魅力がセットになっている点。例えば、八甲田山を背景とする田園
・三陸海岸があること。内陸では、角館や盛岡。白神山地に代表される森林。十和田湖
・東西方向に横断するときの山から海に出る瞬間。メリハリがある
・空気が清涼なこと（２件）
・なまりのある方言が風景以上のものを醸し出す。人情。人々の暮らし（３件）
・歴史的な街並みが各地に残っている点（４件）
・背景の山並みのスモーキーな色と空の決して青ではないグレイッシュブルー
・大きな構図。人が少ない。素朴（２件）

３）　北東北の風景・景観を守り、育てる取組

地域住民による再発見活動の重要性を指摘する意見が多く寄せられた。また、取組みには、地域住民自ら取り組むことの重要性に関する指摘が多い。

●守り育てるために必要なこと・アイディア

①地域住民による取組みに関する意見
・自分たちの住んでいる地域の魅力を知ること。多くの人にまち歩きをしてもらい、「まちの魅力を語り合う」行事への参加運動を起こす。子供たちにも認識してもらう工夫をする。（１５件）
・地域の人たちが誇りを持つことと、地場のものなどでのもてなしが必要。清潔であることも重要（４件）
・活動を点から線・面へと輪を広げて意識を高める（２件）
・町内会単位で木や湧水などの風景を守る活動を起こす（２件）
・自然カリスマ塾のような講座で自然を守る必要性とマナーを教育する
・身近な街並みなどをきれいに清掃したり飾る（２件）
・小中学校での景観教育。地域に景観人を育てる
・例えば、岩木山の美しさの一番の場所はどこかを探し、そのポイントを情報発信する。

①地域住民による取組みに関する意見（つづき）
・住民参加による構想策定（基礎自治体の枠を超えた行政の資金支援が必要）
・国有林の樹木に自分の名前をつけて守る

②改善すべき点に関する意見
・家屋や各種建築物のデザインセンスのなさ、統一性のなさを克服する（４件）
・新たな団地開発の抑制
・開発によって環境を変えることを控え、災害に強い対策を行うことが重要

③活動のアイディアなどに関する意見
・各県に観光大使（各 1000 人）を立ち上げる
・親子景観観察ツアーを三県合同で開催し、結果を TV や新聞で発信する
・大学に研究室を作り、三県で資金を支援し、産学官で研究を深め、専門家を育てる
・TV などのマスメディアを使った粘り強い取組みが必要（２件）
・郷土芸能とまちづくりをセットにするとタイムスリップしたような魅力になる
・名川町の農家へのホームステイのような取組みを各地で行う
・縄文樹林（どんぐり・里山）づくりなどの取組みを行う
・自然と農山漁村などを組み合わせた風景の写真コンテスト、散策会など、地域ごとの情報発信と活動（６件）
・北東北三県ゴミ拾いの日、雪灯篭コンテスト、景観づくりコンテスト、商店街による景観アイディアコンテストなどを考えてみる
・風景だけでなく文化を発信すること。インターネットで直販する際に農園風景もあわせて発信する
・守る観光が必要。農業を主とする守りが重要
・青森県の高校生の景観コンテストの拡大
・古い茅葺屋根の民家などを集会施設として活用することによって保存する
・広大な自然を公園として育てる（予算の問題はあるが）
・ドイツで行っているような観光ルートを北東北レベルで考える（ただし、風景は小さな資源の集合体であるので、もっと狭義に考えることも必要）
・三県による２泊３日程度の、１０コース程度のツアーを企画する

（2） 地元の有識者へのヒアリングによる北東北らしさの認識の把握

北東北ならではの風景・景観の特性に関する認識を把握するため、本調査においては、アンケート調査に加えて、内外の有識者へのヒアリング調査を行った。

また、ヒアリング調査は、まず最初に、今後の有効活用方策を検討するに当たっては、現状の活動の課題等を明らかにすることが有効であると考えられることから、地域内で取組みを展開している有識者へのヒアリングを行い、概要は後述のとおりである。

ⅰ．ヒアリング対象

●青森県；弘前大学大学院地域社会研究科博士課程５名

NPO 法人「三内丸山縄文発信の会」藤川直迪氏、杉山陸子氏

＊青森県青森市に活動拠点をおく。1995 年に発足し、三内丸山遺跡の研究や各種情報誌の発行、他遺跡との交流イベントを行う。

●岩手県； NPO 法人「風景の生命を守る地域づくりネットワーク」田村麗丘氏

＊東京都出身。大手総合コンサルタントで 20 年以上勤務した後に 1995 年よりフリーとなり、岩手県西根町に活動拠点をおき、地域づくりに取り組む。

●秋田県；株式会社「バウハウス」代表取締役森川恒氏

＊昭和 57 年㈱バウハウス設立。秋田市に拠点を置き、日本グラフィックデザイナー協会会員、あきたデザインネットワーク、あきたバリアフリータウンに参画する。

ⅱ．ヒアリング結果の概要

１）地域の資質や特性に関する認識

① **北東北には縄文につながる文化や自然があるが、居住者の意識にそのよさが広く認識されるまでには至っていないのではないか。**

・縄文が特に注目を集めたのは三内丸山遺跡の発掘以降のことである。しかし、関心の度合いや認識も三県で相違がある。一般の人々の意識も浸透しているとは思えない。

・地域の良さを認識するためには、地域の中に再発見する活動をできるだけ多くつくりだす必要がある。観光などの経済に結びつけるためにも、それら取組みを通じてじっくりと取り組む必要がある。

・教育分野での取組みを通じて定着させていく必要がある。

・短期間に成果を求めるのではなく、長期的な取組みが重要であろう。評価をどのように考えるかが問題となる。入り込み客数で評価されても本質的な評価とはならない。

・地域の良さを引き出す取組みは 10～20 年といった長期の取組みが必要である。

②　**北東北は「縄文の文化軸」とも言える。「自然に生かされる営み」と「文化としての自然」が残る。**

・「この文化軸は、自然がそれほど消費されず豊かに残っているエリアである。文化はいつの時代も豊かな自然から生み出される。この自然は来世紀の新しい価値観のもとで、新たなる創造と文化を育むためのエネルギーとなるはずだ。未来への遺産となるのは白神山地だけではない」。（「風景と景観」田村麗丘著・1995 年刊より引用）

③　**北東北は、縄文文化圏であるとともに、ブナ帯文化圏という認識の仕方ができる。ブナの他にも、ヒバや杉がある。「森の圏」という認識が適すると思う。**

・里山は新しい言葉である。もともとは里川、里海という言葉があった。ブナをはじめとする北東北の森は縄文の頃からの資産である。
・ドイツにも森の文化が残っている。ケルト文化はローマ文化やゲルマン文化に圧せられてしまったが、今日まで残っており、見直されようとしている。
・北東北でも、森と生活文化や環境との関係を再評価してみる必要がある。
・岩手には京都から伝わった文化が根づいており、青森や秋田とも異なる独自の文化が形成されているし、太平洋側と日本海側でも生活文化に違いがあるが、森の特性という点では共通する。

④　**北東北には、中世から近代にかけて豊かであった時代の資産が数多く残されているが、それらが活用されず、徐々に失われようとしている。それらは、北東北の重要な資産であり、保存と利用を考える必要がある。**

・例えば、阿仁やその周辺の鉱山の栄えた地域に、大きな商家があり、現在は雑貨屋などになっているが、継ぐ人もなく、徐々に消失ようとしている。
・秋田公立美術工芸大学の倉庫群の再利用も、かつてフランス大使が通りがかりに素晴らしさを発見し、文化的価値の重要性を地元有識者に進言したことによって保存と再利用が実現した例である。

２）活用方策に関する意見

①　**北東北は、観光需要の吸引に消極的過ぎる感がある。楽しみの要素の組み合わせ方も工夫が必要である。観光案内や周遊のための交通サービスなども不備である。**

・例えば、弘前の洋館も、昨年 JAL が取り上げたことを契機にしてはじめて売り出したものである。角館など、良いものは豊富に存在している。
・弘前の洋館も、それだけではがっかりさせることになりかねない。他の要素を組み合わせることを地元で考えなければならない。
・北東北全体に地域内からの発送や発信が少なすぎる。
・取り上げるのも外部資本であり、地元経済に結びつかない。地元では、アップルツアーやサクランボ狩りなどの取組みがあるが、多くは小さな取組みに止まっている。

② **観光案内などの情報提供や交通サービスが不備である。**

・全国の他都市では、まちなかの観光地を巡る１日周遊バスなど様々な交通サービスがあり、情報提供が充実している都市も多いが、北東北の都市ではどこもその部分が不十分。観光都市であるはずの弘前でさえ、まちなかを巡る観光用バスサービスもないし、情報提供も不十分である。

③ **冬の雪景色がうまく活用されていない。**

・北東北の自然には、冬の雪景色が特徴の一つになって良いはずであるが、春の桜や秋の紅葉に比較すると、あまりうまく活用されていない。北海道は逆にうまく活用しているところがある。

・もっと活用できる可能性を秘めているのではないか。地吹雪ツアーも良いが、街の風情や自然も雪によってきれいに演出される。

・雪の風景を活用するためには、決して大掛かりな費用のかかるイベントを企画する必要はない。むしろ、落葉した森や温泉と組み合わせてゆっくり楽しむことのできる活用方法が望まれる。

④ **地域の良さとは、地域の人々が実践することが重要である。**

・地域の良さを発信するためには、地域の人たちが楽しむことからはじめることが重要である。

・例えば、リンゴ狩りでも、リンゴの木を契約して収穫する楽しみがあるが、地域の人たちでも楽しんでいる人たちは少ない。

・地産地消を学校給食に活用することも考えられる。

⑤ **北東北の分散的な地域構造は、各地に独自の文化を育んでいる。それらが広域で結束することによって機能を補い合う必要がある。**

・北東北は、全国他地域に比較すると都市間の距離がある。そのことが、地域地域で固有の文化を生み、様々な個性的な街が形成されている。しかし、それぞれの街の規模は小さく、例えば弘前市でも宿泊施設一つとっても限界がある。

・従って、北東北が良さを売り出すためには、広域での協力関係を形成して機能を補完しあう必要がある。

⑥ **風景や景観、歴史資源を活用して地域おこしを図るためには、中高年に焦点をしぼり、縄文の幅を広げて交流需要を吸引し続けることが必要であり、継続的な活動と、情報発信をし続けることが不可欠である。**

・自然保護や景観は経済と結びつきにくい。経済の活性化に結びつけるためには方向性も変わってくる。地域活力に結びつけるためには、人を引き付け続けることが必要になる。

・三内丸山遺跡はある程度集客があるが、亀ヶ岡遺跡は人が来ない。亀ヶ岡遺跡では人

をひきつけるため発掘を続けようとしている。資源の魅力を磨き、人を吸引し続けるためには、新しい情報を発信し続ける必要がある。

・北東北では、縄文に関する百科事典はある程度出来上がった。今後は、縄文以外のことと結びつけて活用する段階に入っている。

・自然や歴史を含めた体系的な整理が必要であり、その点で風景・景観という概念は有効な視点になる。

・交流需要のターゲットは中高年が主な対象になると考えている。時間とお金に余裕があり、知的好奇心にうったえることができる。

・ふるさとに対する思い、先祖に対する心を発信することが、内外から中高年の交流を吸引する原動力になる。方言に対する愛着を活用することも有効。カーナビに津軽弁が入っており、好評を得ている。

⑦ **北東北の都市は、意識的にも、時間的にも離れている。北東北全体に移動の不便さがある。しかしそれは逆に、スローな観光・癒しの場としては利点となる。**

・北東北三県の結びつきの中でも、青森と秋田との関係は、意識的に希薄であり、時間距離など交通の利便の面でも疎な生活感覚がある。

・弘前～秋田間の高速バスがあるが、なんと、東北縦貫道北上 JC まで迂回する。鉄道もきわめて不便。

・しかしながら、逆に考えると、スローな時間を希望する人にとっては心地よい移動となる。他地域であれば２泊３日ですむ行程が、北東北では３泊４日で楽しむことができる。宿泊施設もこじんまりとしていて団体のパック旅行にも適さないから、喧騒から離れてゆっくり過ごすことができる。地域の人々とコミュニケーションできることも魅力の一つになる。

・経済効率の面では大きな生産を生み出さないかもしれないが、心の豊かさの面では共感を得ることが可能ではないかと思われる。

・時間にゆとりのある高齢者には北東北の観光は適する。

・観桜ツアーのように時間に束縛されるのではなく、個人の意思でかつての周遊券のような、ゆっくりめぐることのできる交通サービスなどが検討されて良いのではないか。

⑧ **素朴でシンプルでありながら、清潔で快適な環境を備える必要がある。**

・都市居住者などの観光需要を受け入れるためには、素朴でありながら清潔で快適な環境を提供することが重要である。

・街並みも、例えば角館では、まちをこうするというコンセプトのもとに、看板をはじめとする周辺の環境を整えなおし、設備を充実した上で、景観の面ではあえて砂利道に戻し、雰囲気を出した例もある。

３）地域での取り組みの現状と課題について

①

日常の地道な活動に対する支援が望まれる。イベントであれば支援が得やすいが、日々の積み重ねが重要である。

・資金的な支援も、イベント開催であれば得られるが、日々の地道な研究に対する支援はほとんど得られていないのが実態である。重要なことは、日々の研究活動であり、その結果を発表するのがイベントである。地道な活動に対する幅広い支援や協力が望まれる。

②

活動を継続するためには、市町村ごと、または共同で学芸員を置くことと、活動連携と組織の範囲を広域に広げ、行政のバックアップと、企業の文化活動に対する協力を求めることを検討する必要がある。

・文化的な活動を継続し、拡大していくためには、資金及びノウハウの面で、NPO や市民運動だけでは限界がある。

・取組みの規模も特定の遺跡ごとの中小の活動では、行政による資金支援も得にくく、広域に拡大することが求められる。

・そのため、縄文に関する取組みも、これまでは県ごとに、また遺跡ごとの取組みが中心であったが、今後は、遺跡間連絡会議を設置し、広域で連携しようとしている。

・青森における活動は、財団設立により、行政による支援を拡大するとともに、企業への協力を要請したいと考えている。そのためには、専門的に取り組み、データを蓄積し、伝承する基盤を形成するとともに、活用に結びつける体制が必要である。

・行政内でも活動グループをバックアップし、共同作業を行うことが望まれ、核となる学芸員の確保が望まれる。亀ヶ岡遺跡でも、つがる市になることを契機に学芸員をおくこととなった。今後各地で展開していくことが望まれる。

（３） 地域外の有識者へのヒアリングによる北東北らしさの評価

北東北の風景・景観資源は、アンケート調査に見られるように、特に歴史的固有性や生活文化面での良さに関する居住者の認識が十分に定着していない、または意識されていない状況があることが明らかになった。

このため、北東北の風景・景観資源の良さを再認識し、活用するためには、外部からの客観的な評価の獲得が重要である。

このため、北東北出身でありかつ客観的に評価することのできる有識者、観光等の分野での活用可能性を判断することのできる有識者、風景・景観の資質を評価することのできる有識者へのヒアリングを実施した。

ⅰ．ヒアリング対象

●菊地正浩氏（㈱NHK エンタープライズ 21 制作センター　ｴｸﾞｾﾞｸﾃｨﾌﾞﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）

＊弘前市出身。NHK 特別番組のシルクロードや司馬遼太郎の歴史街道を行くなどの番組制作を手がける。

●原重一氏（観光開発プロデューサー）

＊元 JTB 理事。全国各地で観光開発を手がけ、国等の委員も多く勤める。

●石川賢治氏（風景写真家）

＊福岡県出身。商業写真家として出発した後に風景写真家に転向。月光で撮る写真で脚光をあび、NHK の特別番組「石川賢治の世界」として屋久島での活動が紹介された。

ⅱ．ヒアリング結果の概要

１）北東北らしさの評価に関する意見

① **縄文の知恵が凝縮している里山や森に着目して、その魅力をどのように引き出すかがポイントとなる**

・北東北の風景の一番のポイントは、都市部ではなく、里山や森に着目することであると思う。

・里山や森は、縄文人の知恵が最も凝縮して詰まっているところであり、それをどうやって引っ張り出すかを考えることがポイントになる。自然との共生ということではなく、人との関わりを学ぶことにつながる。今、縄文文化研究でも一番注目されているところでもあり、里山も全国的に再評価され話題性もある。

・北東北には、古代からの生活の知恵である「雪形」（ゆきがた）が多く残っているが、それを知る高齢者が少なくなるにつれて記録もなくなろうとしている。雪形とは、春先の山の残雪の形で田植えの時期を決めたりした農事の知恵である。昭和３０年代ま

で残っていた自然の暦である。

・景色や風景とは単に花鳥風月ではなく、農作業日記だった。自然との関わりを語る生活の奥行きを再発見することができる。「季節感」と「農作業」と「風景」がセットになっている。

・この他にも、この花が咲くとこういう農作業の時期だといった、自然の暦を持っている。様々な暦があったはずであり、高齢者から聞き出し、データとして収集することも意味がある。

・そのような検証を通じて、地域の人々に、ふるさとの風景や美観に対する認識の再確認を促すことが重要である。その上で、では失われないようにするためにどのようにしたら良いかを考える必要がある。

② **北東北の自然の繊細さ、奥深さは世界的にも特筆に価する。特に、四季の変化に富み、食の恵ももたらすブナ林の素晴らしさは、海外からの来訪者に驚きを与える**

・日本の自然の繊細さは世界的にも稀である。縄文から受け継がれてきた自然環境は豊かな資源となりうるし、特に、中国や韓国の荒涼とした自然がほとんどの人たちには自然が恵をもたらすことは驚きに映るようである。

③ **北東北の中小の都市には、中央から遠かったこともあり、独自の文化が花開いたところがあり、そこに着目することが重要**

・まち部については、中央の文化から離れたところで、独特の知恵と工夫で独自の文化をつくったところがある。弘前の洋館もしかり。明治初期に堀江佐吉という棟梁が、独学で洋館を建てた。多分函館が開港して、そこで洋館を見てまねたものだろうと言われている。

・鹿角も、南部藩と佐竹藩の境界域にあって、秋田藩の出城だった時期がある。幕末に血を流した悲しい歴史もあるが、文化としては秋田でもあり南部でもあるという独特の文化がある。京都大学で日本文化研究者として大抜擢された在野の研究者である内藤湖南の出身地でもある。司馬遼太郎が、東北のアルザスロレーヌ地域と呼んだ地域である。アルザスロレーヌとはフランスやドイツに領土が入れ替わった地域である。

④ **舟運や歴史的な街道の要衝であったまちに、様々な文化が融合して地域に根づいた資産があり、北東北らしさの一つとなる。**

・北前船や北上川の舟運により、上方の文化がもたらされ、繁栄した資産が各地にある。内陸の物資の集散拠点であった江刺などにも歴史がある。北東北三県外ではあるが、酒田や新潟まで含めて、各地に、町のたたずまいをはじめとして特産品などの産業も残っている。また、当時の建造物も残っている。

・岩手では、京都文化が定着し、独自の文化圏を形成している。

・近年、司馬遼太郎の「街道を行く」や吉野古道の世界遺産への登録によって、歴史的な街道が周辺の風景も含めて再評価されようとしている。

２）風景・景観資源の活用方策に関する意見

① **今後、地域の居住者の風景・景観に対する認識を検証することが重要**

・風景・景観は長いスパンでの変化を見直してみると意味がある。５０年程度の間にわたって維持され、残されてきた風景や景観に意味を再認識してみる必要がある。

・単なる景観というと手垢がついている印象を受けるが、では風景といったときに、それはどのようなものかということを、とことん検証してみることが必要だと思う。Ａさんの言っている景観と、Ｂさんの言っている景観とそれぞれ評価が違うとすると、それはどういうことなのか、多角的に再検討する必要がある。

・国立公園が制定されて以降、そろそろ節目の時期を迎えようとしているが、制定された時に著名な画家が風景画を描いた。それらの古い作品を探し出して、どのような見方をしていたのか、データを集めてみることも意味がある。

・現在、環境の時代を迎えて、風景の意味が見直されようとしている。現在の状況と比較することによって変化を知ることができる。

・画家たちは、その風景の最も魅力的な場所を探したはずである。そこから、風景はこんなに変わってしまったのか、失われた風景とは何だったのかを検証することができる。絵画を描くポイントも今と昔では変化してきていると思われる。

・古い絵葉書を集め、今の風景や景観と比較して風景を再発見・再評価してみることも一考である。

・皆が大事にした風景や景観とはこうだったのではないかと確認しあうこともできる。

② **自然や文化をテーマとする活動や交流需要の創出は、経済生産と効率の追求に追いまくられている今の日本に極めて重要であるが、大量の観光需要吸引には直ぐには結びつかないと考える必要がある。じっくり取り組むことが必要。**

・地域資源を即効的な観光需要の掘り起しに活用したいと思うと事情が変わってくる。観光需要を掘り起こすだけなら、エコツアーやグリーンツーリズムより、需要の 40～50%を占める一般的な観光の質を上げる、対応を考える方が効果的である。

・エコツアーは、現在ではせいぜい５％程度のシェアしかない。また、時間と精神とお金に余裕のある人たちが始めた米国のエコツアーに対して、今の日本のエコツアーは似ても似つかないものである。本当のエコツアーが根づくには、経済生産と効率の追求に追われて日々を過ごしている人たちの生活スタイルが変わらない限り難しい。働き盛りの年齢層の人たちがエコツアーを楽しむようになるためには、１週間の休暇を少なくとも３～４回／年とれるような、欧米型の、時間的にも精神的にも経済的にも余裕のある生活にならないと難しい。自分のお金で好きな時に自己発見できるような精神を認める社会になることが前提である。では、そのような社会が日本でできるのかというとはなはだ疑問である。

・一人旅や少人数のグループで旅を楽しむ重要性が認識されないと真のエコツアーは根づかない。

・旅行の付加価値は、専門家やガイドがついてくれると倍増する。エコツアーも、その先進的取組みとして位置づけるならば意味がある。

③ **地域の本当の良さを知ってもらうためには、不特定多数にアピールするではなく、特定少数の意識のある人たちにアピールできるものを大切にすることが重要である。**

・地域の良さを知ってもらうためには、不特定多数の人々に対してアピールする地域資源より、文化人や作家など、意識レベルの高い特定少数の人たちにアピールできるものを大切にすることが必要である。

④ **北東北の良さを世に広げていくためには、例えば、地域外の３人の識者を、月１度くらいの頻度で招いて市民会議や地域塾を開催し、北東北ファンになってもらい、地域にも縄文教のような輪を広げていくことが重要である。**

・今仕事で日本に来ている欧米の人たちはほとんど日本に対する知識を持たないが、学会などの折に農村や下町を訪れ、生活を見てファンになる人が多い。彼らから見ると、日本の農村の生活は心の面で豊かに映るのではないか。そのような人たちにアピールすることが重要。

・ただし、そのような資質が北東北に残っているのか、大切にしているのかというと疑問を持たざるを得ない。

・そのためには、構想を進めるための運動論が必要であり、外部の識者を定期的に招いて市民会議や地域塾を展開することが効果的である。

・マルチハビテーションで住みたいという北東北ファンもいる。一度地域を離れて暮らしたことのある人たちが地域の良さを認識している。

・金沢がアンサンブルを作った時も国際的な人たちを募集した。そのようなことが必要ではないか。三県合同でフィルハーモニーを作って地域を廻るようなことも考えて良いのではないか。

・教育テレビや放送大学でじっくり取り上げてもらうことも効果的である。小中学生や市民講座に面白く教えることも必要。地域を題材とした文学作品を公募することも考えられる。

・商工会や教育分野との連携も必要。それら運動は、ボランティアに頼っていては限界があり継続しない。プロフェッショナルな人が必要。資金を確保する必要がある。

⑤ **時速４キロの世界と時速 40 キロの世界を組み合わせ、それぞれの違いやコントラストを際立たせ、そのことで交流を深めることが重要。**

・例えば、柳田国男的遠野というなら、車の使い方に始まる生活のしかたを変えなければならない。徒歩のスピードとスケールで見る地域に変えなければならない。

・イギリスのナショナルトラストで湖水地域では、ピーターラビットの時代の農業や時間のサイクルにしようとしている。一方、都市は時速 40 キロのサイクルで、かつ徹底的にアーバナイズする必要がある。

・アーバナイズとはインターナショナルな人がいる、国際的な学者がいるということ。学者がいれば、国際会議はいながらにしてできる。
・北イタリアでも、アーバンとルーラルの生活スタイルのメリハリをはっきりさせることによって、都市と農村が並列的な関係になり、エールの交換をしながら中小企業や農業が地域に根づいている。
・例えば、縄文遺跡が出土している周辺を地域モニュメントとすることもアイディアの一つになる。文化的事業と教育事業、公園事業を複合して地域のモニュメントにすることが考えられる。

⑥ **人々の賛同を得る新たな農業の生活スタイルの姿を具体に描いて人々の共感を得ることも大切である。**

・グリーンツーリズムもルーラルツーリズムも農家の主婦にゆとりがないと受け入れてはもらえない。兼業農家が過半を占める現状では、受け入れてもらえる農家は多くはないのではないか。
・週末には、盛岡まで音楽会に行くような、イメージだけでなく生活実態に訴える新しい農業の姿を示すことが望まれる。

６．北東北ならではの風景・景観特性の抽出

北東北ならではの風景・景観特性は、アンケート調査及びヒアリングによって得られた、地元に居住する人々の認識及び外部の有識者の評価と、自然や地域構造等によって概観した北東北の特徴を重ね合わせると、次の５つに集約することができる。

◎四季の変化を楽しむことのできる大自然が豊かに広がる

・自然の豊かさに対する評価は、アンケート調査及び地域に居住する有識者のヒアリングにおいて、北東北ならではの風景・景観特性として自然に関するものが飛びぬけて多いことに見られるように、地域居住者の意識に、ふるさとの原風景として広く共有されている資質であると考えることができる。

・地域外の有識者からも、ブナ林の豊かさや自然探訪の多様性は高く評価され、内外に共通する北東北ならではの資質として位置づけることができる。

◎自然と共生し・自然から学んできた生活文化がある

・北東北の広域分散居住と、人が関与することによって保たれてきた自然の特徴は、北東北の各地が自然と共生しつつ生活してきた、生活文化を表す資質と考えることができる。

・ヒアリングでも、雪形など、自然から学んだ生活の智恵を発掘し伝承する重要性が指摘されている。

◎縄文文化が受け継がれている風景・景観がある

・縄文文化に対する評価、あるいは認識は、地域居住者へのアンケート結果でも北東北らしさとして挙げた回答数がごく少ないことに見られるように、まだ一般に十分浸透していない部分があると考えることができる。

・しかしながら、地域外の有識者へのヒアリングで、北東北に広く分布する縄文遺跡は、単に文化財としての存在だけにとどまらず、自然特性に縄文文化が凝縮して残されていると見られていることに表されるように、幅広く、奥行きのある領域に関係する原点として極めて高い評価を得ることのできる資質であると考えることができる。

・このことは、多様な分野に潜む縄文文化を解き明かすことによって、今後、北東北ならではの地域像を発信する原点として、大きなポテンシャルを秘めていることを示唆していると考えることができる。

◎独自の文化が花開いたまちが各地に存在する

・地域外の有識者へのヒアリングにより、中央から離れた地理的条件により、独自の文化を形成した都市やまちが各地にあり、各々に個性を発揮している点が、北東北の多様性を表すものとして高く評価されている。

◎舟運や歴史的街道の要衝に様々な文化が融合した歴史が残っている

・北東北における人・物の流動は舟運によるところが大きいという特徴があるが、要衝となっていた都市に残されている、多様な文化が融合したたたずまいや産業、歴史的建造物が高い評価を得ている。

第Ⅱ章　北東北の新たな地域像と風景・景観資源の集積及び分布の状況

１．資源の集積及び分布状況の把握の視点

この章においては、北東北ならではの風景・景観特性をもつ資源の集積や分布の状況を明らかにすることを目的として、主に既存の資料から資源を収集し、整理を行う。

風景･景観資源の収集整理に当たっては､それらの活用による連携の展開を念頭におき、これまでに評価が定まっている資源にとどまらず、資源を活用しようとする地域の発想や今後の活用可能性が期待される資源を含めて、北東北のポテンシャルになりうる資源を見出すことを視点とする。

また、風景・景観資源の分類は、Ｉ章で抽出された特性に基づき分類し、さらに活用のためのキーワードを組み合わせてマトリックスで整理した。さらに、分布状況をマップ化し、特性ごとの資源の集積状況や密度が視覚的に明らかになるようにした。このような形で北東北の風景・景観資源を収集整理した試みは、今後さまざまな用途に活用できるものと考える。

このようにして明らかになった北東北の風景・景観資源の状況は、北東北の新たな認識と評価を導き出しうるもので、新しい北東北像の発信につながるものと考える。

２．新たなテーマに基づく北東北像のイメージ

アンケート調査及び内外へのヒアリングによって抽出された北東北ならではの風景・景観特性は、新たな北東北像として発信するためのテーマとして、次のように言い換えることができる。

◎四季の変化を楽しむことのできる大自然が豊かにひろがる ⇨ **四季の変化を楽しむ**

◎自然と共生し・自然から学んできた生活文化がある ⇨ **自然を敬い共生する**

◎縄文文化が受け継がれている風景・景観がある ⇨ **縄文文化を伝える**

◎独自の文化が花開いたまちが各地に存在する ⇨ **生きがいの場を持つ**

◎舟運や歴史街道の要衝に様々な文化が融合した歴史が残っている ⇨ **交易の歴史を知る**

それらテーマに基づく風景・景観資源の抽出の範囲を明らかにするとともに、北東北ならではの地域像として発信することに向けた語り方を試案として整理すると以下のとおりである。

テーマ１；四季の変化を楽しむ

①人に優しい自然と遊ぶ

・北東北に広範に広がるブナ林を主とする二次林（里山など）の自然の植生は、第Ⅰ章で述べたように、白神山地もそもそもは縄文期に形成され、人との関わりの長い歴史の中で推移してきた経緯があることに代表されるように、人が手入し、また守り続けてきたものであるという特徴がある。

・このことは、自然との共生や、ヒートアイランドなどの環境問題に対する認識が高まりを見せる今日、内外に誇りうる重要な資質となりうると考えることができる。

・また、このような特性を備える北東北の自然は、新緑、紅葉、落葉という四季の変化を豊かに表現する。

②祭りの宝庫をめぐる

・北東北においては、四季の変化にリズムを合わせた暮らしが展開され、その節目では、祭りなどの各種行事が人々の楽しみとなってきた。

・北東北では年間を通じて各地で地域色豊かな祭りが開催され、夏季のまつりに加えて、冬季に行われる男鹿・なまはげや横手・かまくらなどは、厳しい冬を楽しく過ごす工夫で知られる。

③心を癒す名湯・秘湯

・北東北各県は、全国的にも温泉地数で高位にランクされる（青森県３位、岩手県９位、秋田県６位；環境省「温泉利用状況報告」より）。また、豊かな自然の中に立地する温泉が多いという特徴がある。

・このように、北東北における生活では、祭りのほかにも、春の山菜や秋のサケなどの四季折々の自然の恵みや、温泉での湯治など、さまざまな楽しみを享受することができる。地域それぞれの立地に応じて、身近にやさしい自然を感じながら、厳しい中にも楽しみの多い暮らしが営まれてきた。

・秋の収穫後の温泉での骨休めや冬の祭りなど、安らぎや癒されるライフスタイルが体験できる。

テーマ２；自然を敬い共生する

①山野に囲まれた心地よいまちやむら

・北東北には、第Ⅰ章で述べたように、居住人口の分布に広域分散居住の特性が見られる。
・このような人口分布の特性により、北東北各地では、多様性に富んだ自然に囲まれて、自然環境と密接な関わりを持った暮しが展開されていると見ることができる。
・その結果、北東北のまちやむらは、周辺の耕地や自然の中にコンパクトにまとまり比較的良好な景観が維持されている。
・それら北東北独特の風景や景観は、地域住民にとっては日常生活の中でいつも目にするありふれたものであるが、外部から見れば、地域の歴史や文化を語る、また表象・象徴するシンボルとなる重要な役割を担うものである。
・独特の風景・景観を守り、育てることは、観光振興や環境保護、都市景観形成などあらゆる分野に関わり、地域社会において非常に広い波及性を持つものでもある。
・一方で、広域分散居住を特徴とする地域構造は、詳細は次章に後述するが、高齢化と過疎化の進展によって、現状のまま推移すると、交通や生活サービス機能など、特に中山間地域の地域社会の維持に重大な影響をもたらす要因となると考える必要がある。
・また、北東北においては新幹線の延伸や高速道路網の発達によって、生活圏の広がりの概念や、地域間の結びつきが大きく変化し、これまでの地域間のつながりが徐々に変化しようとしている。
・このようなことから、これからの時代の北東北においては、風景・景観資源の活用によって、観光をはじめとする交流需要を吸引し、広域分散居住地域全体に広く地域活力と生活サービスの確保を図ることが課題となっている。
・また、北東北には、緩やかな山野の特性を生かした牧畜が営まれており、その風景は例えばスイスの美しい山野の風景に通じるところがある。
・北東北の繊細に手が加えられた水田風景は、代掻き期から稲刈りに至るまで、季節の変化とともに優れた美観を呈し、見慣れた人々の感興を呼ばずとも、国内外から訪れる人々を驚嘆させている。
・北東北には、あきたこまちやひとめぼれ等の名品種が数多くあり、・・の里といった風景として再評価することができる。

②北東北の聖地を巡る

・北東北の仏教は、平安時代に円仁（慈覚大師）によってもたらされた天台密教に由来するものが多い。
・北東北を代表する寺院の中でも、平泉・毛越寺、平泉・中尊寺は、宮城県及び山形県の、松島・瑞巌寺、山寺・立石寺とともに、平安時代における慈覚大師円仁の開基に遡るが、これら４ヵ寺の寺地は、平安京にも見られる「四神相応（しじんそうおう）」により選ばれたと言われる。

・広大な北東北地方ならではの見方であり、地域横断的かつ宇宙的なスケールで自然と調和した空間、景観を認識するものとして注目に値し、北東北における郷土認識の概念を広げるものと言える。
・また、北東北には、自然と密接に関係する暮らし方の歴史を背景として、恐山等の山岳信仰や霊場が多数存在する。
・恐山のイタコの「口寄せ」に感銘を受けた岡本太郎は、1961 年に中央公論社に発表した「神秘日本」（現在、みすず書房から単行本として出版されている）の中で、わざわざ恐山まで訪れる理由を、「聞いているオガさまもアッパたちも満足なのである。実にいい間合いだ。こういう自然の嬉しい姿がなければ、わざわざ下北くんだりまでやってきた甲斐がない」と述べている。
・自然や動植物にかかわることを特徴とする、独特の民俗芸能や行事も自然を敬い、祈ることにつながる。
・縄文の頃から脈々と受け継がれてきた、情念や習俗が、北東北には他の地域にはない密度で存在し、山岳宗教はそのことを表象するものといえる。
・北東北の大地と密接にかかわってきた歴史を表すものとして認識することができる。

＊四神相応とは、地相からみて、天の四神に応じた最良の土地柄。すなわち左方(東)は青竜に相応しい流水、右方（西）は白虎の大道、前方（南）は朱雀の汚地（おち＝くぼんだ湿地)、後方（北）は玄武の丘陵を有すること。官位・福禄・無病・長寿を併せ持つ地相。

テーマ３；縄文文化を伝える

①ふるさとの原点・縄文ワールド

・北東北には、先史時代の遺跡が数多く存在する。特に縄文時代の出土遺跡から類推される文化は、東日本（中でも東北）が西日本を圧倒している。

・青森・三内丸山遺跡等の発見、発掘は、縄文人の生活についての新たな知見をもたらし、遠く隔たっていた縄文を身近に感じさせ、縄文と現代のつながりを強く再認識させるものとなった。三内丸山等で復元された縄文の建物や集落の景観は、先史時代に自然との共生により栄えた北東北の文化の姿を彷彿とさせ、さらには北東北全域にわたって地下に眠る縄文の世界へと想像を掻き立てるものとなっている。

・このように、近年相次いで発見された縄文遺跡と研究活動の高まりは、現代の山野や田園の風景の中に日本のルーツである縄文の痕跡を見出そうとするなど、北東北の風景のイメージをより豊かにするものともなっている。

・中でも北東北は、北東北一帯から北海道南地域に広がる円筒土器文化圏と呼ばれる、独自の圏域を形成していたことが明らかになってきた。

②縄文人の心に触れる

・北東北の民俗芸能には、なまはげや鹿踊（ししおどり）に見られるように、動物や霊が登場するが、それは、狩猟時代の動物の供養のための祭儀が残っているためと言われる。

・北東北の民俗芸能には、農耕、漁労、狩猟にまつわるものが多く、原始のたくましさや純粋さを現代に伝えるものとして認識することができる。

③受け継がれてきた食の知恵

・北東北の食文化には、縄文に通じる共通性が残っているといわれる。

・北東北一帯に分布する縄文文化は、保存に適した鮭などの食材があったことにより越冬が可能であったことが存立した要因の一つであると言われる。

・また、人との関わりの深い自然特性は、縄文の食生活と関連づけて考えると、木の実の恵などとなって縄文の人々の生活を支えてきた歴史があり、それが現代まで破壊されずに維持されてきたものであると再認識することができる。

・縄文人の食材には、山菜や木の実、鮭をはじめとする魚介類が登場し、それは、例えば食材や食文化の地域差や「粥の汁」などとなって現代に通じるといわれている。日本のじゅんさい生産量の９割を占める秋田のじゅんさいなど、現代も、自然の恵みを楽しむ文化に豊かなものがあり、自然の中で食す文化もある。

・鮭や山菜などを保存する技術も、冬季の生活の知恵を受け継ぐものと考えることができる。

・食料自給の高さと、北東北ならではの食文化は、スローフード運動や健康食ブームなど、内外からの観光交流需要の吸引に重要な要素となりうる。

テーマ４；生きがいの場を持つ

①ふるさとの歴史を学び・創る

・江戸期には日本の米相場を左右する食糧基地として栄え、文明開化以降には、鉱工業などの分野で日本の産業の近代化を支えた北東北には、戦災被害が比較的少ないこともあって、歴史的街並みや、弘前の洋館、秋田県小坂町のわが国最古の木造芝居小屋「康楽館」などのように、贅を凝らした建築物や産業遺産が存在する。

・それら資産は、ふるさとの歴史を伝えるものであり、また、日々の生活の中でふるさとの風景となって記憶に残るものである。

・周辺に広がる、縄文時代まで遡り身近に接することのできる自然の風景も、例えば、江戸の面影を残す街並みや近代都市の背景に、中・遠景となって展開し、歴史的環境を表す貴重な文化的蓄積であることを再発見することができる。

・また、北東北のさまざまな資質と資源は、それを活用し、活動の輪を地域全体に広げるとともに、地域に暮らす人々が活用し、また、積極的に参画できるものとすることが求められる。

・その点で北東北の歴史的建造物は、例えば弘前の洋館にはカフェを備えて人々の憩いの場になっているものがあることや、江刺の舟運に関連した多数の蔵が店舗やギャラリーとなって人々の文化的活動や憩いの場として親しまれている例に見られるように、身近に存在する。

③文学ロマンに浸る

・北東北では、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に描かれた鉄道など、文学や絵画に数多くの風景が描かれてきた。

・それらは作家や画家の生きた時代を映す世界が今も変わらず広がる風景そのものでもある。

・また、文学界では、北東北は芥川賞作家２名（青森、秋田各１名）、直木賞作家１０名（青森２名、岩手５名、秋田３名）を輩出しており、特に岩手県の５名は、全国でも、東京（44名）、大阪（11名）、福岡（7名）、兵庫・北海道（各６名）に次ぐ位置にランクされる。

・詩の文化にも北東北には特筆すべきものがあると言われる。観光分野や地域居住者のレクリエーション・交流分野の活動の創出として、詩史と文化財や原風景の所在との関係を探ることも効果的である。

・同様に、長い歴史を通じて農林水産業により形づくられてきた風景や社寺や町並みなど東北の歴史が刻まれた歴史的な景観は、そこに擦り込まれた歴史を雄弁に語る貴重な文化資産である。

・北東北には、こうした大地に根ざした文学、芸術作品や、地域性豊かな歴史が厚く蓄積されており、そのストックは他地域と比較しても強い独自性を有していると言える。

テーマ５；交易の歴史を知る

①歴史街道を行く

・近代以前の北東北では、広大なエリア間を結ぶ有力な輸送方法として、北前船などの海運及び北上川などの河川を利用した舟運が発達した。

・北前船の寄航した港や大河川は、人や物資の流れを担い、それに沿って全国各地から文化が伝わり、港町ならではの交流の跡、あるいは流域独自の文化が育まれてきた。

・岩手県江刺市の、134 棟の蔵を活用してまちおこしの取組みが展開されている例も、かつて大船渡や釜石などの三陸沿岸から山を越えて塩が運ばれ、江刺で船に積まれて北上川を下った集散地であった歴史を活用したものである。

・また湖沼についても、中世の北方交易を支えた十三湊など、交易を支えてきた歴史を有しているものがある。

・奥州街道、羽州街道をはじめとする歴史的な街道筋には、東西の峠越えルートなど、近年にルート変更が行われたものもあるが、旧態を残しているものもある。また、それら旧街道に沿った歴史的な街並みも、評価や保存地区としての位置づけなどが定まっていないものが多いが、各地に存在すると考えられ、地域活動によって充実していくことが望まれる。

・北東北でも、近代の産業や交通体系の発展、市街地の拡大など、変化が進んだが、それらの変化を超えて、北東北の過去とのつながりや北東北本来の自然とのつながりを再発見しようとするとき、それら街道や港、大河川は示唆に富んだ手がかりを与えてくれる存在となる。

②旅人の見た北東北

・北東北の大地や生活文化は、下記のように、さまざまな紀行文学を生んだ。北東北の探訪に当たっては、それら先人の道筋をたどり、変化を見聞することも有効であると考えられる。

＊菅江真澄（18 世紀「菅江真澄遊覧記」）

＊吉田松陰（19 世紀「東北遊日記」）

＊イザベラバード（19 世紀「日本奥地紀行」イギリス人女性）

＊ブルーノタウト（20 世紀「日本美の再発見」ドイツ人）

３．新たなテーマに基づく風景・景観資源の集積及び分布の状況

（1） 住民の活用に資するデータベース及びマップの構築のマトリックス

地域の人々が共有し、活用するためのデータの分類整理は、資源の特性や分野だけでなく、日常的な生活におけるアクティビティパターンに適したものとすることが求められる。

日常的なアクティビティパターンのうち、遊ぶ、あるいは楽しむことに関するものとしては、大きく分けると、学び発見することに係わる行動、コミュニケーションすることに係わる行動、ゆっくりと休むことに係る行動の３つの形態がイメージしやすい。

従って、資源の所在は、第Ｉ章で抽出されたテーマ性と、アクティビティパターンとの組み合わせによって分類することが適し、以下のように関係性が整理できる。

北東北ならではを発見・発信するテーマ		活用のためのキーワード
●四季の変化を楽しむ ●自然を敬い共生する ●縄文文化を伝える ●生きがいの場を持つ ●交易の歴史を知る	⇔	●発見し驚く楽しみ ●語らい・触れあい・集う楽しみ ●くつろぎ癒される楽しみ

また、風景・景観資源の活用は、電子情報、出版物、映像など、様々なメディアを駆使して内外に情報を発信・提供していくことが望まれる。

資源の活用により、地域の人々による活動を創出するためには、情報は、一方的に提供される、固定的なものではなく、相互にコミュニケーションし、充実していく必要がある。さらに、情報発信の対象や方法も、徐々に拡大していくことが望まれる。

このため、検討は今後さらに深める必要があるが、下記のように、共有し、コミュニケーションツールとすることのできるシステムとして体系化することが望まれる。

1） 当面の活用手法

・インターネットを活用したデータ検索及びコミュニケーションシステムの構築（各県HP の活用や北東北環境フォーラム、観光事業者と連携）

2） 将来的に検討する活用手法

・映像による縄文や雪の風景などのテーマ性のある海外向け紹介・ドキュメント番組（地元テレビ局と全国ネットのテレビ放送局との連携による）

・地元の研究・活動団体による写真集や出版物の発行

（２） 風景・景観資源の集積状況の整理

「北東北風景・景観資源データベース」の構築

＊詳細データはデータベース編参照

	発見し驚く楽しみ	語らい・ふれ合い・集う楽しみ	くつろぎ癒される楽しみ
四季の変化を楽しむ（自然系）	●人に優しい自然と遊ぶ ＊国立・国定・県立自然公園 ＊世界遺産白神山地 ＊自然環境保護地域と特徴 ＊香り風景１００選 ＊雪形（ゆきがた） ＊自然を守り育てる活動	●祭りの宝庫をめぐる ＊祭りカレンダー ＊夏のはじける祭り ＊冬祭り	●心を癒す名湯・秘湯 ＊北東北の名湯・秘湯
自然を敬い共生する（農山漁村系）	●山野に囲まれた心地よいまちやむら ＊農林水産業関連文化的景観重要地域 ＊景観形成重点地区 ＊美しい日本のむら景観コンテスト受賞 ＊美しい日本の村景観 100 選		●北東北の聖地を巡る ＊山岳信仰（霊山・霊場） ＊民間信仰 ＊歴史的な社寺 ＊義経所縁の古寺と周辺 ＊四寺回廊
縄文文化を伝える（歴史系）	●ふるさとの原点・縄文ワールド ＊縄文遺跡 ＊縄文をテーマとする研究・交流活動	●縄文人の心に触れる ＊民俗芸能 ＊田沢湖芸術村とわらび座	●受け継がれてきた食の知恵 ＊マタギの食と森 ＊山菜・雑穀料理 ＊保存する知恵
生きがいの場を持つ（都市産業系）	●ふるさとの歴史を学び・創る ＊歴史的街並み（重要建造物、美観地区・伝統的建築物群保存地区） ＊都市景観 100 選 ＊弘前の洋館 ＊産業遺産（明治・大正期） ＊ふるさと眺望点（青森） ＊残したい景観（岩手）	●文化をつくり・発信する場がある ＊活動グループ ＊活動拠点	●文学ロマンにふれる ＊宮沢賢治ゆかりの風景 ＊遠野物語
交易の歴史を知る（交通系）	●歴史街道を行く ＊北方交易遺構（十三湊） ＊北前船の寄港地と文物 ＊舟運の歴史 ＊歴史街道	●旅人の見た北東北を行く ＊菅江真澄 ＊イザベラバード ＊ブルーノタウト ＊吉田松陰	

（3） 風景景観資源の収集範囲

以上により、収集整理した風景・景観資源については、データベース編に記載しているが、その概要を紹介する。

なお、データ収集の範囲及び選定基準は次のとおりであり、すべての風景・景観資源を網羅的に収集整理したものではなく、今後、地域における活動によって充実・成長されるものである。

1） データ収集の分野等の範囲

本調査によるデータ収集は、資源の活用によって連携・交流活動の展開及び新たな経済活動の創出につながることに重点をおく。

従って、データ収集は、これまでに一定の評価が得られている資源に止まらず、地域住民による発想まで含めて、今後の活用可能性が期待される資源までを収集範囲とし、具体的には次のとおりである。

①既往の基準によって一定の評価が与えられているもの
- 学術的に一定の評価を得ている資源（例えば文化財保護制度など）
- 行政等による基準に基づき一定の評価を得ている資源
（例えば都市景観・農村景観表彰制度により選出されているもの）
- 全国的な活動グループや有識者による評価が定着している資源
（例えば日本百名山や日本三大美林など）

②明確な基準はないが関心が高まっているもの
- 行政が主導する取組みや企業等の民間主体が参画するイベント（例えば縄文や祭り）
- 集落単位、あるいはグループや個人研究者の小規模で個別的な取組み
（例えば地域有志による保存活動）

2） 選定基準の考え方

新たに掘り起こし、または再発見して光を当てることによって、地域づくりに活用できることが重要である。

そのため、資源の選定に当たっては、次の点を基準として考えることとする。

①歴史として記録に現れるもの
②文学や紀行文に取り上げられているもの
③地域住民の認知度が高いもの
④生活様式または習慣・風習・技術として定着しているもの
⑤地域的広がりを持って分布しているもの
⑥観光をねらいとする場合は一定の集客力を有するか、それらと関連性を有するもの

（4） 風景景観資源の分布状況

「北東北風景・景観資源マップ」の作成

北東北ならではの風景・景観資源は地域に広く分布する。しかし、例えば、美しい日本の村などが含まれる「山野に囲まれた心地よいまちやむら」といったテーマによる資源の分布を見ると、津軽地方や下北半島に集中的に分布していることに見られるように、テーマによっては集中的に分布するエリアや、エリアごとの個性・アイデンティティが浮かび上がる。

地域住民による日常的なレクリエーションなどのためのアクティビティパターンの活用のキーワードごとの分布状況においても、活動の多様性や生活の豊かさや楽しみが見えてくる。

また、総合的な分布状況を見ると、観光などの分野で活動圏域の広がりや資源の密度状況を知ることができる。

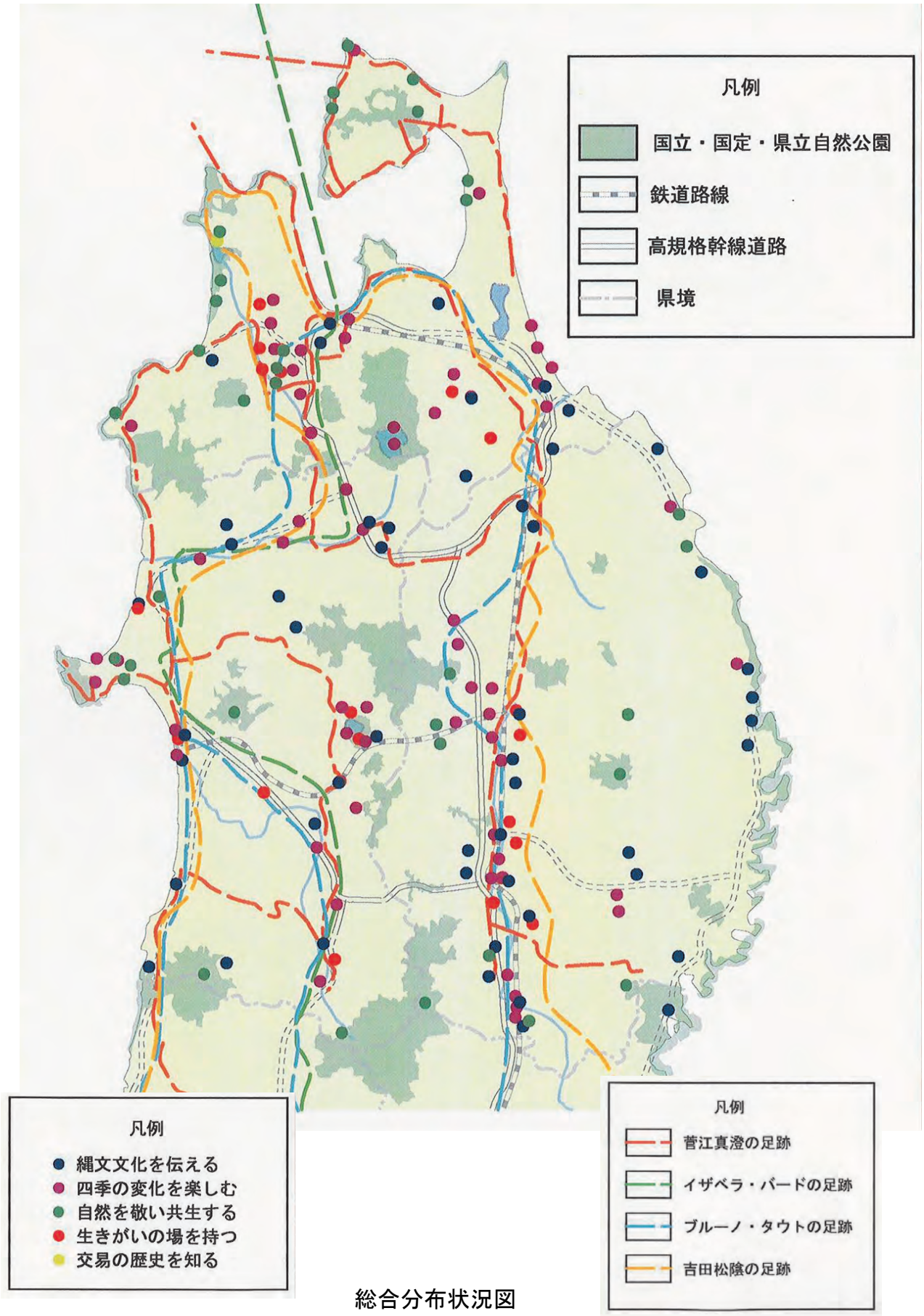
このように、ここで作成した北東北風景・景観資源マップは、地域住民をはじめとする多様な主体が広く共有することによって、次の利活用に資するものとなる。

・地域住民をはじめとして、教育分野などの多様な主体が共有することによって、様々なテーマでコミュニケーションし、活動を呼びかける材料となる
・地域住民や観光客にとって、資源の存在を知るガイドマップとなる
・また、さらに充実すべき資源等の情報提供のためのたたき台となる
・公的主体や民間経済界・団体にとって、広域的な連携による活用プラン策定の基礎資料となる
・また、広域的な連携を呼びかける範囲や具体の主体を検討するためのデータとなる

利用目的に沿ったマップの作成は、本調査によって整理した情報を活用して多様に取捨選択することが可能である。

以下、総合分布状況、テーマごとの分布状況、活用キーワードごとの分布状況を示す。

なお、作成したマップには、データによっては即地的に図示することが困難なものがあり、データベース編の情報を全て掲載しているものではない。

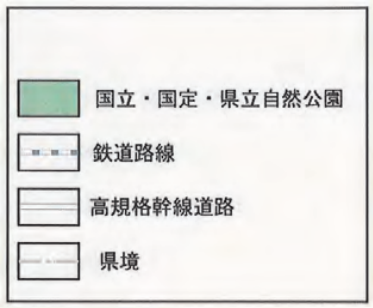

凡例
国立・国定・県立自然公園
鉄道路線
高規格幹線道路
県境
凡例
縄文文化を伝える
四季の変化を楽しむ
自然を敬い共生する
生きがいの場を持つ
交易の歴史を知る
凡例
菅江真澄の足跡
イザベラ・バードの足跡
ブルーノ・タウトの足跡
吉田松陰の足跡

総合分布状況図

テーマ別分布状況図

＜四季の変化を楽しむ＞

注；図中では「心を癒す名湯・秘湯」の分布は省略している



テーマ別分布状況図

＜自然を敬い共生する＞